

日本の博物館収蔵の樺太（サハリン）アイヌの金属製口琴

直川礼緒

- 目次
- 1 はじめに
 - 2 北海道博物館（旧・北海道開拓記念館）
 - 3 アイヌ民族博物館
 - 4 市立函館博物館
 - 5 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターと田辺尚雄のスケッチ
 - 6 サハリン州郷土博物館
 - 7 杉山寿栄男コレクション
 - 8 マンローコレクション
 - 9 国立民族学博物館
 - 10 映像資料「北方民族の楽器」
 - 11 おわりに

Key Words 口琴 (Jew's harp)、樺太アイヌ (Sakhalin/Karafuto Ainu)、楽器学 (Organology)、一次資料 (Primary source)、目録 (Catalog)

1 はじめに

「ムックリは世界中に広く見られる口琴の一種で、竹製のものが一般的だが、金属製のものもある。…」(村木美幸による「口琴」図版解説より、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2008)。

2015年2月、北海道立アイヌ民族文化研究センター(当時)の甲地利恵氏より、連絡を受けた。2015年4月から同センターと北海道開拓記念館が統合して、新たに「北海道博物館」として開館するにあたり、アイヌ文化に関する展示もリニューアル、これまで収蔵庫にしまわれていた旧北海道開拓記念館所蔵の「樺太アイヌの金属製口琴」を展示に出すとのこと。そのキャプションを考えるにあたり、日本国内の博物館等の施設において、他にいくつの「樺太アイヌの金属製口琴」が所蔵されているのか知りたい、という質問であった。

筆者は、20年以上前、「日本の音の文化」(小島美子・藤井知昭編)に掲載された論文「日本の口琴の源流」で、白老のアイヌ民族博物館と、開拓記念館の二館に「樺太アイヌの金属製口琴」が所蔵されている旨を記した(直川 1994)。アイヌ民族博物館に4点、開拓記念館に1点である。その後、新たにもう1点が、京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センターに所蔵されている、という情報も入ってきていたので、「日本国内においては、『樺太アイヌの金属製口琴』とされる資料は、三館に計6本が収蔵されている」旨をお伝えした。特に最後の京都の例は、筆者自身が、「この楽器が樺太アイヌのものである」との判断に関わった(三木 2006)⁽¹⁾のものであり、なぜそのような「鑑定」を下したのかを含め、本稿では、各資料について、情報を整理し、問題点を抽出しつつ、さらなる新情報も加えて、比較検討を行いたい。

また、金属口琴は、樺太アイヌ独自の文化事象では決してなく、近隣の民族が共通して持つ、口琴文化の流れのなかのひとつとして捉えなければならない。樺太アイヌの金属口琴は、どこから来てどこへ行ったのか。それを知るために、南の北海道アイヌ、本州以南の日本人(いわゆる「和人」)、北のウイルト(オロッコ)、ニヴフ(ギリヤーク)、間宮海峡を挟んで、大陸側のウリチ、ナーナイ、ウデへをはじめとするアムール川(黒竜江)沿いの先住民族、さらには、シベリアのサハ(ヤクート)といった民族の文化における、金属口琴の記録や現状の諸相を洗いなおす必要がある。本稿ではその第一歩として、北海道アイヌの金属口琴についても検証する。

もちろん、話は、金属製の口琴だけでは済まないのではあるが、本稿では、これまであまり深く追及されてこ

直川礼緒：日本口琴協会代表、東京音楽大学付属民族音楽研究所社会人講座講師
(1) p.128に「日本口琴協会・直川礼緒氏の協力も得て『カニ・ムクナ』と推定した。」との記述。

なかった⁽²⁾、金属口琴に焦点を当て、より多くの人にその存在が知られている、竹製の口琴ムックリや、トンコリなどの他の楽器については、あくまでも金属口琴との関わりにおいてのみ言及するに留めていることをお断りしておく。

なお、ここまでの文では、「金属製の口琴」「竹製の口琴」と、素材の違いを基準に二種類に分けて話を進めてきたが、これは本質的な分け方とは言えない。話の範囲が限られている——例えば、樺太アイヌと北海道アイヌについてだけ考える——場合は、分かりやすく便利なのだが、もう少し広い視野で捉えようとする、誤解を生じかねない表現であることに注意しなければならない。例えば、さしあたって近い将来問題となるのが、サハリン北部のニヴフ民族の真鍮製の口琴を考えるとときである。素材は、真鍮という「金属」でありながら、形状としてはムックリによく似た薄い板状であり、紐を引いて、切り出された弁を振動させる点まで、ムックリと同じである（ただし、引き紐の付いている位置は異なる——ムックリは振動弁上であるのに対し、ニヴフの薄板状の真鍮口琴は、枠に付けられている）。素材で分ける原則に従うならば、この楽器は明らかに「金属口琴」であるが、発音原理上は、明らかにムックリに近い。いわゆる「金属製の口琴」と「竹製の口琴」、二種の楽器の本質的な違いは、素材ではないとしたら何か。

口琴の分類方法には、これまで様々なものが存在してきた。「弁が、枠そのものから切り出されているidioglot」に対して「別に作られた弁が、後から何らかの方法で、枠に取り付けられているheteroglot」という考え方 (Sachs 1917)⁽³⁾は、台湾の口琴のように、「薄板状でありながら、弁が枠から切り出されてはおらず、後から別の素材のものが取り付けられている」口琴をうまく分類できない。

「弾く／紐を引く」という、「弁の起振に際しての人間の関わり方の違い」だという考え方もあるが、例えば、フィリピンやタイ、カンボジアに行けば、ムックリと同じような薄板状でありながら、紐がなく、弁の付け根側

の枠の先端を弾くものが存在する。世界中の口琴を、うまく大きく二つに分ける基準となるポイントはどこにあるのだろうか。

筆者は、この二タイプの、より本質的な違いを、演奏時に「枠を歯に当てるか／当てない（で唇に軽く触れる程度にする）」か、という点にあると考える。本稿では暫定的に、前者の、「歯に当てない状態で、弁が正しく振動する（当てると、正しい振動が得られなくなる）、多くの場合「薄板状」の口琴lamellate Jew's harp⁽⁴⁾を、「Aタイプ」とする。対して、歯（あるいは、それに代わる、質量を持った物体、具体的には、斧・金槌など）に当てないと、正しい振動が得られないもの、多くの場合、枠が「湾曲状」にかたち作られた口琴bow-shaped Jew's harp⁽⁵⁾を「Bタイプ」とする⁽⁶⁾。

本稿で中心的に扱うのは、樺太アイヌの「Bタイプ」の口琴である。「鉄口琴」「金属口琴」などと呼ぶ場合は、出典の記載に従う場合に限り、素材に注目する場合は、「鉄製の口琴」「金属製の口琴」などと記述する。その際、原典にはっきりと「鉄」製と記されている場合以外は、「金属」とする。また、楽器の呼称についても、原典に従う場合を除き、本文中では極力「ムックリ」「カニムックナ」などの民族語名称は避け、「口琴」とした。

実物資料は、市立函館博物館のものと、民博のものを除き、実見してはいるが、本稿での形状の描写は、図録やインターネットで公開されている写真に基づく。不明な部分は、各館に問い合わせた。

2 北海道博物館（旧・北海道開拓記念館）[B-KA001]⁽⁷⁾

枠は金属（おそらく鉄）を素材とした、鍛造の口琴（図1・2）で、稜線が、枠全体に（片方の腕部の先端から、環状部を通して、もう一方の腕部の先端に至るまで）通っている。すなわち、両端の細くなった角棒をまず鍛造し、そのあと枠の形に成形したものである。環状部は「しずく形」で、わずかに両端に「エラ」が張っている。環状部から腕部へは、なだらかな曲線を伴って

(2) 竹製のムックリに関する詳しい論考には、ほとんどの場合、金属製の口琴に関する言及がある。例えば、谷本（1960、2000）、日本放送協会編（1965）、河野（1966）、小林（1988）など。

(3) このアイディアはおそらく、クラリネットのような楽器と、その祖形としての民俗楽器的な「葦笛」（例えば、イタリア西部サルデーニャ島のラウネッダスや、ニヴフのベウス）など、単簧のビーティングリードの気鳴楽器の下位分類の際に重要なポイントとなる差異を、安易に流用したのではないかと考えられる。口琴の場合は、弁（ヤリード）と枠との関係は、取り付け方の差に留まらず、楽器全体の構造と、音の発生原理とに関わる。

(4) ただし、こちらのタイプには、パプアニューギニアの例のように、竹筒を素材として、円筒をそのまま使用するものもあるため、「薄板状」という分類呼称が相応しいかどうか、検討の余地がある。

(5) 直訳すれば「弓型」の口琴だが、日本語の「弓」では、曲がり具合があまり大きくない、円弧状ものがイメージされがちである。Bowの原義は、「曲げられたもの」であり、本稿では、「湾曲状・湾曲型」とした。他の訳語としては、「馬蹄形」などもあるが、特定の形が強くイメージされ、「半月形」「三角形」「しずく形」などの、別の形を排除するおそれがあり、適切であるとは思えない。より相応しい語の提案が待たれる。

(6) この分類の難点は、説明が厄介で解りにくいという点である。また、両者の中間的な楽器の実例も（実験的なものではあるが）あり、熟考を要する。

(7) 本稿では、それぞれの口琴（や口琴の図像）に、仮に番号を振る。例えば、[B-KA001]は、「Bタイプの樺太アイヌの1番目の口琴」の意。



図1 北海道博物館蔵、樺太アイヌの金属製の口琴とそのケース[B-KA001] 上面。
写真提供：北海道博物館、撮影：出利葉浩司

入っていく。

弁は、おそらく鋼であると思われるが、あまり弾力性は感じられない⁽⁸⁾。杵の「表側（歯に当てるのとは逆の、振動弁の先端が曲げられている側）」に切られたホゾに装着し、カシメで固定してある。カシメは、弁に隣接する部分だけではなく、かなり広範囲（長距離）に渡って、杵の稜線が潰されている。弁に、刃物のようなエッジを削り出してはいない模様。「杵と弁との鋭いエッジを向き合わせ、隙間をなるべく狭くする」といった、良い音を出すために必要不可欠な要素は、それほど追及されていない感がある。弁の先端部は、丸みを帯びた直角に上方に曲げられ、最先端部は、さらにもう一度丸みを帯びた直角に曲げられている。最先端部を丸める処理はされていない。これら二つのアールの緩さは、焼き戻しなどの熱処理を行うことなく、物理的に曲げた可能性を示している。また、曲げの方向は正確ではなく、真上から見ると、少々捻じれている（図1）。

日本国内の「樺太アイヌの口琴」の実物資料としては唯一、ケースを伴う。ケースは木製で、上面の表面にそれほど緻密ではないアイヌ模様の彫刻が施された蓋は、「楽器の環状部」底部側の端に突き出して設けられた回転軸を中心に、反時計方向にスライドさせて開けるようになっている（蓋の先端は、斜めにカットされているた



図2 北海道博物館蔵、樺太アイヌの金属製の口琴とそのケース[B-KA001]。
写真提供：北海道博物館、撮影：出利葉浩司

め、反対方向には開かない）。弁の、直角に曲げられた先端部を収納する部分は、ケースの裏側まで穴が通っている。

この楽器についての詳細は、「北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1 民族I」（北海道開拓記念館編 1981）中に、「娯楽・芸能」に関する「楽器等」のひとつとして、「整理番号：3547、収蔵番号：32975、資料名：口

(8) 見た目だけの判断で、実際に弾力を確かめたわけではない。音程・音色・音量は不明。

琴、点数：1、製作地：樺太、年代：——（同目録p. 1の「凡例」によれば、「製作年代不明」の意）、収集地：紋別市、氏名：田中美穂、備考：（空欄）の記載が見える（p. 112）。サイズも「計測値：箱長182 幅48 厚24 琴長117 幅37 厚7」⁽⁹⁾とされている。なお、「受入区分（寄贈、寄託、保管換、採集、発掘、製作等）は削除」されている（同、凡例）とのことなので、中の、「氏名」が、寄贈者なのか、製作者なのかは不明である。

この点については、北海道博物館アイヌ民族文化研究センターの小川正人氏と出利葉浩司氏より、これらは田中美穂氏が亡くなった夫の旧蔵資料を寄贈したものであること、田中氏の夫はアイヌの民具資料などを集めていた方で、樺太アイヌの人たちと付き合いがあり、そのなかで樺太アイヌの資料を多く集めていたとの情報をいただいた。また、同館の資料情報の記録票には、収蔵年月日が「昭和47（1972）年2月20日」であり、この日付から推測すると、開拓記念館の開館前の資料収集のなかで収集されたものであると考えられることもご教示いただいた。ただし、この記録票には、これが「樺太アイヌ」のものである、とのはっきりした記述はないとのことである⁽¹⁰⁾。

なお、この目録には、素材に関する記述がなく、また、資料名も「混乱をさけるために和名で統一」（同、凡例）されており、写真も全資料が掲載されているわけではないので、少々わかりにくい。例えば、当該口琴の前には、「整理番号：3545、収蔵番号：23447、資料名：口琴、点数：1、製作地：釧路市、年代：——、収集地：札幌市、氏名：近藤鏡二郎、備考：（空欄）」と「整理番号：3546、収蔵番号：27174、資料名：口琴、点数：1、製作地：北海道、年代：——、収集地：江別市、氏名：酪農大学、備考：常設展示」の2点の口琴が掲載されているが、そのサイズの記述（長130と136、幅16と14、厚3と5）から、おそらく竹製のAタイプ（薄板状）の口琴であると判断されるのみである。

この北海道博物館のBタイプの口琴とそのケースは、図録「北海道文化展」〔埼玉県立博物館〕1972）でモノクロ写真が掲載されており（p. 55）⁽¹¹⁾、巻末の目録では、「番号：219、名称：口琴、採集地：（空欄）、法量：185×48、所有（管理）者：北海道開拓記念館」となっている。上記の「目録」（北海道開拓記念館編 1981）とは、ケースの長さが3mmほど異なっている（サイズは、言うまでもなくケースのサイズであり、口琴本体の

サイズは掲載されていないと考えられる）。同展の他の展示資料は、採集地を「樺太」「樺太、白浜」などと記しているものもあるが、この口琴を含む、開拓記念館からの資料はすべて、採集地は空欄である。

また、同じ楽器の写真は、開拓記念館の「アイヌ民族の生活を中心にした常設展示テーマ2『先住の人びと』をよりよく理解するための解説書」である「先住の人びと」（北海道開拓記念館編 1978：17 第55図）にも、「口琴」のコラムに、短い解説文とともにモノクロ写真が掲載されている。ケースは写っておらず、竹製のAタイプの紐口琴と一緒に並べられている。ここでも楽器名は「口琴」であり、アイヌ語による名称は記載されていない。

この「口琴」と樺太アイヌ語の口琴の呼称である「カニムクン」とを関係付けたのは、同館発行の「民族調査報告書 資料編I」（北海道開拓記念館編 1973a）であると思われる。同書は、樺太出身の、樺太アイヌ文化の伝承者4名への、「アイヌ民族の信仰」を中心とした聞き取り調査の報告である。サハリン島中西部の恵須取郡恵須取町恵須取マサラマンマ出身、明治33（1900）年生まれの「H. F. 媼」からの聞き取り情報を紹介する中で、「口琴＝ムクン <muxkun> 鋼鉄、鉄製の口琴＝カニムクン <kani-muxkun＝鉄製の一口琴>」という記述があり、そのすぐ下に、当該口琴とケースの写真が「カニムクン」というキャプションとともに掲載されている（p. 18）。この報告書については北海道博物館アイヌ民族文化研究センターより情報の提供を受けたが、そのとき窓口となった小川氏によれば、少なくともこの報告書の紙面には、本資料が実際にそう呼ばれたのかどうか、についての根拠は明示されていないとのことである。とはいえ、例えばこの「H. F. 媼」が、当該口琴を実際に見たとしたら、おそらく「カニムクン」と呼んだであろう。ただし、それは日本人が日本語で「金属口琴」と言っているのと同じで、例えヨーロッパの金属製の口琴を見せられたとしても、それは彼女にとっては「カニムクン」である可能性が高い。

結局言えることは、「開拓記念館の口琴は、樺太アイヌのものである可能性が高い」こと、そして『「H. F. 媼」の知る樺太アイヌ語では『カニムクン』と言う』ということに留まる。

なお、同報告書中の、サハリン島南東部の栄浜郡栄浜村小田寒出身、明治39（1906）年生まれの「T. H. 翁」

(9) 寸法は、原文ではcmで記載されている場合が多いが、本稿では、すべてmmで統一する。

(10) 本稿の目的は、「樺太アイヌの口琴とされている」資料の事実関係を明らかにすることであり、そのことの是非を問うものではない。

(11) 掲載写真の、口琴の枠の環状部の内側、そして弁の付け根に近い部分の「影」と思われる部分には、不可思議な円弧状の白い形が見える。理由は不明。

に対する聞き取りの中には、「口琴の総称をムクナ <muxkuna>という。」という情報が掲載されている (p. 34) が、こちらには写真や図版はない。

また、「民族調査報告書 資料編II」（北海道開拓記念館編 1973b）には、やはり小田寒出身、明治34（1901）年生まれ「U. N. 媼」よりの聞き取りの中に、下記の記述もある（写真・図版はない）。

「口琴の総称をムクナ <muxkuna=口琴の総称>といい、竹の口琴をトホムクナ <tox→top—muxkuna=竹製の一口琴>、鉄製の口琴をカニムクナ <kani—muxkuna=金属の一口琴>という。

イレヘテもいろいろある。昔風の人は初対人どうしがウルイルエ <u—ruy—rue→ruy—e=互い（の間）を一強く一強く一させる=互を緊密にさせる=挨拶する>をするもので、その状態をレヘテ <rex→rek—te=音・曲に一する>したものがある。イルルイルエ <ir—uruyrue=一続きの挨拶>といい、「ルイルイルヘーヘ、ルイルイルヘーヘ、ルイルイルヘーヘ、ルイルイルヘ、ルヘーヘ、ルヘーヘ」とイレヘテするものである。」⁽¹²⁾

西海岸では「ムククン」、東海岸では「ムククナ」と呼ばれるのではないかという仮説が成り立ち得るが、言語学的により詳細な検証が必要だろう。

三十年以上の時が経ち出版された図録「千島・樺太・北海道 アイヌのくらし：ドイツコレクションを中心に」（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2011）では、当該口琴は「番号：97、アイヌ語：カーニムククン／カーニムククナ、日本語：口琴、地域：—（同図録p. 10の「凡例」によれば、「情報なし」の意）、年代：20世紀、所蔵館：北海道開拓記念館」として、カラー写真で掲載されている (p. 58)⁽¹³⁾。「地域」（同「凡例」によれば使用地あるいは収集地）が不明なのに、なぜ樺太アイヌ語の二種の名称を与えてあるのか、また「カニ」がどのような理由で「カーニ」に改められたのかは、図録の中に記載はみあたらないようである。ここでは、ケースと口琴が、美しいカラー写真で掲載されている。口琴本体は、他の例とは異なり「裏側（歯に当て、口腔に向く側）」の写真が採用されており、この口琴の全体像を

知る上で、貴重な資料となっている。ただし、振動弁の最先端部を下に向けてあるために、振動弁に杵の自重が加わり、弁が裏側に持ち上がった状態で、撮影されている。少々楽器に負担がかかった状態ではあるが、おかげで、弁の弾性の度合いが見て取れる。

巻末の「出品資料リスト」では、「寸法：l. 117 w. 37」という、1981年の「目録」と同じ口琴の採寸の数字が記載されている。また、「収集者：田中峰雲」として、「目録」中の田中美穂氏の夫君と思われる人物の氏名が記されている。

本稿を書くにあたり、北海道博物館の出利葉氏に、あらためて楽器の寸法を細部にわたり測り直していただいた（2016年1月16日）ところ、全長118.9（弁の最先端部までの長さ）、最大幅（環状部）38.3、厚さ（高さ）は杵の環状部で8.4、腕部の先端で4.0、腕部の先端底部から弁の先端上部までの高さ14.7であり、「目録」中の数字とは異なるものであった。

3 アイヌ民族博物館 [B-KA002]、[B-KA003]、[B-KA004]、[B-KA005]

白老のアイヌ民族博物館には、4本の金属製の口琴が所蔵されている。同館発行の「児玉資料目録II」（財団法人アイヌ民族博物館 1991）に写真と情報が掲載されている、「収蔵番号61549、61550、61770、61771」の4本で、「鉄製口琴」と記載されている。そのうち61770と61771の2本は、常設の樺太アイヌ展示に出品されている⁽¹⁴⁾。すべて児玉作左衛門北海道大学名誉教授（1895-1970）の収集資料であり、その「ご遺族よりアイヌ民族博物館が借り入れした」（同「目録」p. 7「例言」）2,300点余りの資料に含まれている。児玉は、北海道帝国大学医学部教授となった1929年に、「樺太、ナイブチ、ロレイ、タランドマリ地域を調査」したとのこと（同「目録」p. 3「略年譜」）だが、その折りに現地で入手したものかどうかは、現時点で不明。

(12) 東京芸術大学音楽学部小泉文夫記念資料室のオープンリール音源に「mukkuna (muhkuna) の旋律」として、「yokenke yokenke」、「ruy ruy ruhe」、「kon kon kokon」の3種の「演奏」（ムククナの口唱歌。ムククナそのものの演奏ではない）と、本人による「解説」（ムククナにまつわるお話）とが、5タイトル6点残され、公開もされている（DAT番号：0365-1、曲・解説順番号：01-1、01-2、01-3、02、03）。http://www.geidai.ac.jp/labs/koizumi/opentape_search.html（アクセス日：2016年1月1日）。1967年4月、網走市 網走郷土博物館にて小泉文夫採録。演奏者の西平うめは、「U. N. 媼」と同一人物であると推定される。「民族調査報告書 資料編II」（北海道開拓記念館編 1973b）に記載されたものと非常に近い「イレヘテ」が、それより6年ほど前に、実際にどのように発音・演唱されたか知ることのできる、貴重な資料である。この録音の存在は、北原（2015）によって知った。この中で北原は、この口唱歌にもとづき、金属製の「口琴の試演」を行い、公開している。

(13) 同じページに「1942年以前」に「N. G. マンロー」によって収集された「北海道アイヌ」の「ムクク」のカラー写真が掲載されている。原資料番号「27174」とあるので、1981年の「目録」で「収集地：江別市、氏名：酪農大学、備考：常設展示」とされている竹製のAタイプの口琴と同定されるが、「目録」で「長136 幅14 厚5」となっている寸法が、図録では寸法が「l. 138 w. 14」となっており、全長が2ミリ異なる。この「ムクク」は、解説書「先住の人びと」（北海道開拓記念館編 1978）に写真が掲載されている楽器とは別のものである。本稿「8 マンロー コレクション [B-KA010]」、注（43）も参照。

(14) 2016年1月26日、アイヌ民族博物館学芸課の八幡巴絵氏に確認。

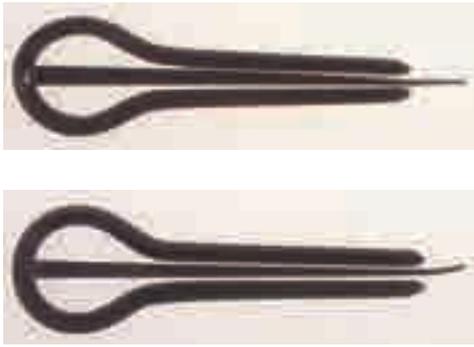


図3 アイヌ民族博物館蔵、樺太アイヌの鉄製の口琴[B-KA002] (同館の収蔵番号61549) 上と[B-KA003] (61550) 下。
「アイヌ民族博物館児玉資料目録II」(財団法人アイヌ民族博物館1991)より

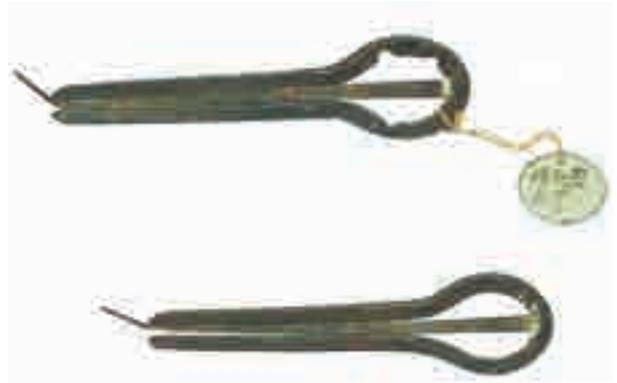


図4 アイヌ民族博物館蔵、樺太アイヌの鉄製の口琴[B-KA004] (61770) 下と[B-KA005] (61771) 上。
図録「アイヌ 一美を求める心」(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2010)より

[B-KA002]は「目録」の巻末のリストによれば「収蔵番号：61549、資料番号：(空欄)、資料名：鉄製口琴、アイヌ語名：kani muxkuna、計測値：全長113 幅31 厚さ5、備考：(空欄)」であり、次の[B-KA003]とともに撮影されたほぼ真上からの写真が、カラー (p. 11) とモノクロ (p. 61) で掲載されている (図3)。

杵は、鍛造の口琴で、稜線は、杵全体に通っている。[B-KA001]が、全体に無骨なつくりであるのに比べて、こちらはスマートな印象。杵の太さ自体は、腕部先端近くになってもそれほど細くなっていない。これは、手作りの鍛造であるとすれば、かなりの技術を要する (通常は、角柱状態に「叩き伸ばして」いくと、どうしても両端が細くなる)。ありものの工業製品の鉄の角材あるいは丸棒を使用して、「削り出した」可能性も考慮に入れるべきだろう (いずれ、杵表面のヤスリ目の存在を確認したい)。環状部は円形に近い「しずく形」で、環状部と腕部の境には、「角 (かど)」が見られる。製作時に、棒状の素材から、まず両腕部を120度程度に折り曲げ、その後、環状部を丸めたことが明確に見てとれる。環状部に対して腕部が長く (約1対2)、バランスのとれた美しいフォルムである。腕部の両端は、ヤスリで削って尖らせてある模様。

弁は、おそらく鋼であると思われるが、[B-KA001]と同様、あまり弾力性は感じられない。[B-KA001]とは逆に、杵の「裏側 (歯に当てる側、振動弁の先端が曲げられているのとは反対側)」に切られたホゾに装着し、カシメで固定し、さらに何らかの手法 (「ろう付け」か) を使って固着しているらしく、接合部分に変色が見られる。このような、カシメのみによらない接合は、世界の口琴の中では少数派で、ホゾの精密な成形に自信のない、

それほど技術の高くない製作者による場合が多い⁽¹⁵⁾。弁にエッジが切ってあるかどうかは、要確認。ただ、「杵と弁とのエッジを向き合わせ、隙間をなるべく狭くする」努力が見られるので、音に対する配慮はなされている模様である。

弁の先端は、緩いカーブを伴って鈍角に上方に曲げられており、これも、焼き戻しなどの熱処理を行うことなく、比較的肉厚の弁を物理的に曲げたものと思われる。弁の最先端は、丸める、直角に曲げる、などの処理は施されていない。音程等は、他の3本も含め不明。

[B-KA003]は、「目録」の巻末のリストによれば「収蔵番号：61550、資料番号：(空欄)、資料名：鉄製口琴、アイヌ語名：kani muxkuna、計測値：全長111 幅33 厚さ5、備考：(空欄)」。

[B-KA002]や、後述の [B-KA004]とも、全体的なフォルムはもとより、弁と杵との接合の仕方や、弁の先端部の曲がり具合などの細部を含め、非常によく似た作りで、おそらく同じ製作者によるものである (図3下)。

[B-KA004]は、「収蔵番号：61770、資料番号：(空欄)、資料名：鉄製口琴、アイヌ語名：kani muxkuna、計測値：全長113 幅31 厚さ5、備考：(空欄)」で、なぜ前の2点とあとの2点に収蔵番号に開きがあるのかは、現時点では不明。「目録」p. 100に、次の[B-KA005]とともに写ったモノクロ写真が掲載されている。

[B-KA005]は、[B-KA002]～[B-KA004]の3点と、全体的な形状はよく似ているが、大きく異なるのは、環状部内側に施された、四箇所丸い「削り」である。環状部

(15) 技術の高い製作者でも、弁と杵との隙間に水分が入り込み、錆を呼ぶのを防ぐために、瞬間接着材等を注入する場合もある (現代の例)。

を成形した後に、丸ヤスリで削ったものだと思われる（先に削ってから曲げると、環状部はスムーズに曲がらない）。他の目的が考えられないので、おそらく、デザインを意図したものと思われる。他に例を見ない、非常に珍しい装飾である。「収蔵番号：61771、資料番号：（空欄）、資料名：鉄製口琴、アイヌ語名：kani muxkuna、計測値：全長111 幅31 厚さ5、備考：『カニムックリ樺太』』となっている。備考欄の記載は、そのように記載されたタグが付けられている、という意味である。なぜタグに「カニムックリ」と書いてあるのに、目録ではkani muxkunaとしたのかは不明。

[B-KA005]ともう1本（よく似ているため、判断が困難であるが、おそらく[B-KA003]か）の写真は、アイヌ民族博物館で1985年7月5日から8月31日まで開催された「北方民族展」の図録（伊藤・内田・東編 1985）にも掲載されている。巻末の「展示資料目録」によれば、「番号：S-53からS-56」まで全て、「資料名（和名）：鉄製口琴、資料名（民族語名）：カニムククン、計測値：L 110 W32、収集地：樺太、年代：—、資料所蔵先：アイヌ博物館、備考：（空欄）」となっており、全て樺太で収集された樺太アイヌのものとしてされている。ただし、2本が並んだ写真を見ただけでも、サイズは微妙に違うように見え、4点が完全に同じとは考えられない。写真（p. 30）も、2本の「鉄製口琴」が並んで載っているにも関わらず、キャプションは「S-53」としか記載されておらず、安易に鵜呑みにはできない情報ではある。アイヌ語資料名も、カニムックリ（タグ）でもkani muxkuna（目録）でもない「カニムククン」の表記であり、呼称を巡ってどのようないきさつがあったのか、謎である。

なお、[B-KA002]は、図録「馬場・児玉コレクションにみる 北の民 アイヌの世界」（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2000）にも写真（カラー）が掲載されている（p. 51、番号144）。写真のキャプションに相当する、資料名称は、日本語で「鉄製口琴」アイヌ語で「カニムックリ」となっている。巻末の「出展資料リスト」でも同様。[B-KA005]のタグの情報に従ったのか、と思いきや、その理由は「凡例」に記載があり、「資料名称は、本展のために付けなおしたものであり、所蔵者ないし保管者が通常用いている名称とは異なる場合があ

る。アイヌ語の表記は、北海道ウタリ協会編（1994）アイヌ語テキスト『アコロイタク』に準拠し、カタカナ及びローマ字で表記した」とのこと。つまりは、樺太アイヌの可能性が高い資料でも、北海道アイヌ語に翻訳して表記してある、ということだろうか。確かにこの口琴は、「出展資料リスト」上は、収集地などの記載が入る「備考」は空欄だが、他の、はっきりと「樺太で収集された」と記載されている資料の扱いは、どうなっているのだろうか。詳しい方のご意見を伺いたい⁽¹⁶⁾。

[B-KA005]と[B-KA004]は、図録「アイヌ 一美を求める心」（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2010）にも写真がある（p. 118、番号292、293）（図4）。カラーで、これまで見てきた写真とは異なり、斜め上方から撮ったもので、弁の先端の曲がり具合がよくわかる、優れた写真である。特に、[B-KA005]は、「カニムックリ樺太」と手書きの文字が記された、丸い紙のタグが、紐で枠に取り付けられている状態がはっきりとわかる。カニムククナというカタカナ表記は、同館のものとしては初出か。

ところで、この図録には、資料として参照する際に注意すべき点がある。上記[B-KA005]と[B-KA004]の2本を、巻末の「出品資料リスト」で、61549（=[B-KA002]）と61550（=[B-KA003]）と誤記し、サイズも「児玉資料目録II」の当該各口琴のデータをそのまま記載しているのである。似通った[B-KA002]、[B-KA003]、[B-KA004]を取り違えるのならまだしも、特徴的な[B-KA005]を誤認するとは、何とも不可思議な話である。

この[B-KA005]は、インターネット上で読める、アイヌ民族博物館発行の「月刊シロロ」2015年7月号中の記事「北方の楽器たち（2）」（北原 2015）にも写真が掲載されている。丸いタグが、丁度楽器の環状部の下に入り込んでおり、少々不自然。だが、弁の先端部の曲がり具合はよくわかる⁽¹⁷⁾。

4 市立函館博物館 [B-KA006]

[B-KA002]、[B-KA003]、[B-KA004]に非常によく似た金属製の口琴が、市立函館博物館に所蔵されているこ

(16) この図録の「鉄口琴」の英訳「steel Jew's harp」は相応しいとはいえない。確かに振動弁はsteel、すなわち「鋼」製ではあるが、それよりも第一に、日本語原文「鉄」に対して「steel」は明らかな誤訳であり、「iron Jew's harp」とすべきである。

(17) ここで北原は、「アイヌの口琴は北海道においてはムックル、樺太西海岸ではムククン、東海岸ではムククナと呼ばれます。」「金属製のムックルはカニムククンと呼ばれます。」とし、[B-KA005]のキャプションには「カニムククナ」の語を用いている（原文では、「ル」「フ」はすべて半角の「ル」「フ」。アクセス日2016年2月26日）。

なお、これに先立つ記事（北原 2006）では、[B-KA005]のモノクロ写真を文章全体のバックに配しつつ、「樺太ライチシでは鉄製の口琴をカーニムククン『金属の口琴』と呼びます。」としている。

とが、脱稿間際になって判明した。図録「樺太アイヌ民族誌 一工芸に見る技と匠一」（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2004）に、番号「154カニムックナ」が掲載されていることに、前述の甲地氏が、偶然気が付いたのだという（図5）。念のために、同博物館に確認すると、確かに所蔵しているとの回答であった。図録では「寸法：長112 幅32 高9 厚5、所蔵者：市立函館博物館、収蔵番号：児玉無番」となっており、同館学芸係の大矢京右氏によると、「受入番号H10-51、児玉作左衛門が収集したものです、収集年や収集地などは不明」とのことであった（2016年2月2日私信）。



図5 市立函館博物館蔵、樺太アイヌの金属製の口琴[B-KA006]。

図録「樺太アイヌ民族誌 一工芸に見る技と匠一」（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2004）より

アイヌ民族博物館の特に[B-KA002] (61549) と細部に至るまで非常によく似ており、双子と言ってもおかしくない。明らかに同じ作者によるもの。寸法も、[B-KA002]に比べて長さが-1、幅が+1の誤差があるだけである。はじめは、同じ楽器で、記載情報が間違っている⁽¹⁸⁾のではないかと思ったのだが、念のため確認してよかった。音程等は不明。

5 京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター [B-KA007]と、田辺尚雄のスケッチ[B-KA008]

日本の民俗音楽の研究者としては草分けとして知られる音楽学者田辺尚雄（1883-1984）が、樺太で収集した、樺太アイヌの「鉄製」（三木 2006）のBタイプの口琴が、京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センターに所蔵されている（図6）。この口琴の詳細は、「田辺尚雄・秀雄旧蔵 楽器コレクション図録」（[同センター編] 2006）⁽¹⁹⁾に、

カラーやモノクロ写真とともに掲載されており（「図録」の番号246）、またインターネットでも情報が公開されている（京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 収蔵資料検索データベースARTIZE 田邊氏寄贈コレクション）。ただし、図録とネット情報を比較するだけでも、例えば、ネットで「国名：日本」、図録で「地域：ロシア連邦サハリン」とするなど、混乱が生じているのが見て取れ、また図録巻末の「個別楽器のデータ」中だけでも、竹製のものと思われる番号230～243の「ムックリ」14本をすべて「日本？」の「樺太アイヌのものと思われる」とするなど、確認不足の点はあるが、本稿ではこれらの問題については深く追及しない⁽²⁰⁾。

一番の問題は、この楽器が、本当に樺太アイヌのものか、という点である。

以前から、田辺尚雄が収集した楽器の中に、Bタイプの樺太の口琴があるのではないかと、いう可能性は存在していた。その手掛かりとなるのが、1950年11月1日～7日にかけて国会図書館で開催された、アジアの音楽関係の図書や楽器などの展示会「音楽文化資料展覧会」の目録（国立国会図書館編 1950）である。P. 7にある番号「17、18、19」が「口琴」であり、「17」は台湾の「ロボ」2点（二簧のものと四簧のもの、各1点。どちらも竹枠におそらく真鍮の弁）、「18」は樺太の「ムックリ」または「ムックリ」とされる竹製のAタイプの口琴で、これら計3点は写真もあり、どのような楽器か、よくわかる（ただし、明らかに長さの異なる2本の「ロボ」の長さを、どちらも「約七糎」としており、問題がある）。もっと大きな問題は、写真のない「19」の口琴で、「トンコン（ギリヤーク語）、ムホニユ（オロッコ語）、簧楽器、民謡用、樺太、近代、一四×四糎」とある。幅が40mmあるということは、Aタイプの薄板状の口琴とは考えられない。では、ニヴフあるいはウイльтаのBタイプの口琴なのだろうか？

上記は4点とも、「東洋音楽學會蔵」となっているので、20年ほど前、東洋音楽学会にも問い合わせたが、そのような楽器は所蔵していないとのことであった。が、この展示に出された「東洋音楽學會蔵」とされる楽器は、三絃（蛇皮線）等を含め、田辺尚雄のコレクションであることを教えてくださいました。早速、小島美子国立歴史民俗博物館名誉教授を通じて、ご子息の田辺秀雄氏

(18) この図録では、同じページの国立民族学博物館所蔵のトンコリの写真が裏焼きになっている。そのため、他の情報も間違っている可能性があるのではないかと判断した。

(19) 「田邊」「田辺」の表記は、原典に従う場合以外は、「田辺」とした。篠原・笹倉（2007）、甲地（2011）、も参照のこと。

(20) 収集地については、当時の日本領の樺太であり、現在はロシア連邦のサハリンになっている、という事実をどう統一して表記するか、その指針さえ決まれば解決する問題であろう。また、ムックリは、少なくとも235は、図録の写真（p. 81）を見れば明らかとなり、日本語の演奏法解説の紙が入った、日本国内で入手された「北海道アイヌ」のムックリである。



図6 京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター蔵、樺太アイヌの鉄製の口琴[B-KA007]。

写真提供：京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター



図7 LP「南洋・台湾・樺太諸民族の音楽」ジャケット裏に掲載された、[B-KA007]を含む田辺尚雄・秀雄親子の楽器コレクションの写真。

図版提供：ユニバーサルミュージック合同会社

に尋ねていただいたが、「トンコリはあるが、口琴はわからない」との回答で、それ以後深く追及することはしなかった。

2005年6月のことであったと記憶するが、京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター特別研究員（当時）の三木俊治氏の訪問を受けた。今は同センターに寄贈された田辺尚雄旧蔵資料⁽²¹⁾の中にある口琴が、どこのものかわかるだろうか、ということであった。

持参された2本のBタイプの口琴のうち、1本は明らかにオーストリアのモルンという村で作られたものであった（「図録」の247番）。杵の作り、振動弁の根本の形状、振動弁が、ありものの鋼の板材から切り出されたものではなく、手作りの鍛造である点などから、比較的古い時代のものであることが見て取れる。

もう1本は、非常に珍しい形のもので、特徴的なのは、「尾部」の存在、杵の環状部の形状、そして、杵の腕部の先端の広がり方、の三点である。

「尾部」とは振動弁が、杵の環状部底部の接合部分を

超えて、長く伸びていることで、インド、ネパール、パキスタン、アフガニスタン、ウズベキスタンなど、南アジア～西アジア、そして中央アジアの一部にかけてのBタイプの口琴に特徴的な形である。その役割は、楽器の演奏に際して杵の環状部を保持するにあたり、この尾部を利用して、しっかりと楽器を固定するのである。また、先端に房飾りなどを付ける場合もあり、多分に装飾的な意味も持つようでもある。日本でも、江戸時代に流行した「口琵琶」のイラストに、短めの尾部のあるものが見える（山崎・谷・曲亭ほか 1824）。その他の地域では、多くの場合、「尾部」は口琴製作の最後の作業過程の一部として、切り落とされる（「折り」落とされる）場合が多い。

杵の環状部は、全体に丸みを帯びた三角形で、腕部へは、急激な角度を伴うことなく、なだらかに入っていく。[B-KA001]～[B-KA006]などの、しずく形や円形に近い形とは明らかに異なり、古今東西、世界でも他にほとんど例を見ない形状である。近いフォルムの環状部をあえて挙げるとすれば、ノルウェーやスウェーデンなど、北欧のものか。

杵の腕部は、先端に行くに従って、かなり細くなり、その先端は、外に向かって広がり気味、しかも弁との間の狭い隙間は形成されておらず、これではよい音は出ない。実用の楽器かどうか、大いに疑問のあるものであった。

その際の計測で、振動弁の先端から杵の底部までの長さ約95、尾部を含めた全長約140、環状部の最大幅35。杵と弁との接合部は、表側に切ったホゾに差し込んでカシメてある。弁は、尾部では素材のまま、環状部の途中から叩いて薄くしてあり、先端に行くに従って、かなり細く（幅が狭く）形作られている。杵の腕部の先端の位置で、弁が直角に上方に曲げられ、さらに最先端数ミリが斜め前方に曲げられている（丸められてはいない）。

これこそ、国会図書館に展示された、形のわからない、ニヅフカウイльтаの口琴で、その楽器が、今、目の前に現れたのだろうか、と心ときめくと同時に、「この楽器なら、写真を見たことがある」と思った。それが、1978年に東芝EMIから出版されたLP「南洋・台湾・樺太諸民族の音楽」（以下「LP」）のジャケット裏に掲載されている、楽器などのカラー写真のうちの二葉である。

一葉は、「②ジョーズ・ハーブ2種（樺太）」というキャプションのもと、当該口琴が、竹のAタイプの口琴と一緒に写っている（図7上段中央）。この竹の口琴は、持ち手側の輪になった紐が失われてはいるものの、杵の形状などから、あきらかに、上記「音楽文化資料展覧会

(21) 田辺尚雄・秀雄両氏の楽器コレクションおよそ300点の楽器が寄贈され、2001～2002年の搬送を経て収蔵された（三木 2006）。

目録」にも掲載されている「樺太のムックナまたはムックリ」である。

そしてもう一葉、「⑤各地のジョーズ・ハーブ 左より、ヨーロッパ、インド、樺太アイヌ、フィリピン、北海道アイヌ2種、台湾3種」というキャプションの、田辺親子収集の世界各地の口琴（Bタイプ3本、Aタイプ6本）が写っている写真（図7下段右）。台湾3本のうち2本は、「展覧会目録」でもモノクロ写真にある2弁口琴と4弁口琴、また、「北海道アイヌ」とされる2本のうち1本は、前述の写真「②」のものと同じで、「展覧会目録」では「樺太」の「ムックナまたはムックリ」とされていたものである。ここですでに地域に関する混乱が見られるが、それはともかく、この写真では、当該Bタイプの鉄製の口琴は「樺太アイヌ」と明記されている。

また、子息・田辺秀雄による、楽曲などの詳しい解説中（p. 12）には、下記の一文がある。

「(2)⁽²²⁾ ジョーズ・ハーブは2種、ムックナと呼ぶ。金属製と竹製がある。竹製は北海道アイヌ（ムックリ）と同種のもの、金属製のはヨーロッパのものと同じ形であるので、旧露領時代にロシア人から入手したのではあるまいか。（ジャケット写真2）

これらも主として女性が用い、退屈な時などよく鳴らしている。これは擬音をすることが多い。即ち海鳥の声、馬の歩く音、山の神が自分の子をあやす子守唄、手斧で木を削る音、薪を割る音などである。」

このLPは、田辺尚雄の録音・調査、田辺秀雄の企画・監修を謳っており、秀雄の解説に加え、父・尚雄も、調査旅行の概要を書いた長文を寄せている。記載に間違った情報があれば、チェックしているはずである。であれば、当該口琴[B-KA007]は、「樺太アイヌ」の口琴で決定、でよいのではないだろうか。

ところが、事はそう簡単ではない。同じLPの解説書のp. 12に、「37. 樺太アイヌ族の楽器」というキャプションのイラストがあり、「トンコリ」と、「ムックナ」としてAタイプの「(甲)」およびBタイプの「(乙)」が描かれているのだが（図8）、そのBタイプの金属製の口琴の形が、ジャケット裏の写真のものとはまったく異なるのである。（なお、同解説書には、「32. ギリヤーク族のコンコン（ジョーズ・ハーブ）」を演奏する男性の写真や、「34. ギリヤーク族及びオロッコ族の楽器」と

して、一弦の擦弦楽器「トンクル」、口琴「ムホーニュ」のイラストなど、貴重な情報があるが、1923年の樺太調査で得られた「楽器や踊用の小道具」は「アイヌ族のみである」と秀雄によって明記されているので（田辺・田辺 1978：解説. 12）、[B-KA007]がニヴフやウイльтаの楽器である可能性は低い⁽²³⁾。これら民族の口琴や楽器については、別の機会に検証したい。）

イラストのBタイプの口琴の、枠の環状部は、ハート型（底部中央が内側に押し入れられたような形）⁽²⁴⁾で、腕部の先端は、まるで掌を空に向けているかのように開いている。そして、何よりも、「尾部」が無い。弁の最先端は、丸めてあるように表現されている。これらの特徴のすべてが、このイラストは[B-KA007]とは異なる楽器であることを示している。この違いは、どこからきたのだろうか？ トンコリと、Aタイプの竹の口琴（明らかに、「音楽文化資料展覧会目録」や、LPジャケット裏の写真にも登場した「樺太のムックナまたはムックリ」）は、大ざっぱながらも形状の特徴をよく捉えたイラストとなっているのに、何故このようなことが起こるのか。

このLPのイラストは、レコード会社の（？）本職の作図担当者によって、清書されたような表現である。その元となったイラストは存在するのだろうか。

このLPに収められた録音が行われた、田辺尚雄の樺太調査旅行の様子は、田辺自身の手によって「島國の唄と踊り」（田邊 1927）の中の「樺太土人⁽²⁵⁾の音楽——アイヌとギリヤーク、オロッコ——」の章で、詳しく報告されている。それによれば、1923年8月3日午前10時頃「アイヌ部落たる白濱」⁽²⁶⁾に到着した田辺は、午後1時半から30分ほど、白濱教育所に召集されたアイヌの老若男女を前に音楽の講演をし、そのあと、踊り、歌謡、楽器演奏など、樺太アイヌの人々の様々な芸能を目にしている。

口琴に関しては「アイヌの楽器」という見出しの「(第二)」として（「(第一)」はトンコリ）下記の記述がある。「ムックナ⁽²⁷⁾——これは第十圖に示したやうな楽器で、甲は竹製、乙は金属製である。金属製のは近世になつて外國から來たものらしく、これは我邦でも嘗てビヤボンと稱して盛んに行はれたものである。竹製のは長さ五寸位の竹片の中央に細長い舌を切り込んだもので、その一方を手を持ち他端に糸を付けて之れを口に當て

(22) (1) はトンコリについて。

(23) 同時に、国会図書館での展覧会の口琴「19」に関しては、「トンコン（ギリヤーク語）、ムホニユ（オロッコ語）」などといった情報は参考として記載されているだけで、少なくとも、1923年の調査旅行で収集されたニヴフやウイльтаの口琴ではない、ということがわかる。

(24) 環状部が「ハート形」の口琴は、カザフスタンやトルクメニスタンなど、中央アジアに見られる。

(25) 現在では適切ではない差別的な用語や表現は、原典の引用に限り、そのまま使用している。

(26) 白濱（白浜）は、前述「T. H. 翁」や「U. N. 媼」の出身地である小田寒と同じく東海岸で、小田寒よりやや南にある。

(27) 傍点として、丸い記号「○」が三つふられている。

つゝ糸を強く弾いて引くと舌が振動し之れが腔口に共鳴して一種の音を發するのであつて、此の口腔の形を種々に變化すると各種の音ができる。そのことはビヤボンと同じである。之れは臺灣の生蕃が用ゐて居る糸琴又は口琴と稱するものと同じ性質のものであるのは頗る面白い。

此の樂器も主として女がやり、退屈な時などにはよく之を鳴らして居る。然しこれは夜はやらない。それに此の樂器では他の音を眞似ることが多い。例へば

- (1) ルイルイルへへという發音⁽²⁸⁾、
- (2) 「ニタシペ、ハフェ」(海馬の鳴き聲。)⁽²⁹⁾
- (3) 馬の歩く音。
- (4) 山の神様が自分の赤兒を抱いて子守唄を歌ふ聲。
- (5) イケウリ、ハフェ(手斧で木を削る音)。
- (6) ニー、ナサ、フミヒ(薪を割る音)。

などを眞似るのである。此の樂器はチャシヌマといふ

女が之をよくした。」

これらの演奏例は、竹製のAタイプと金属製のBタイプどちらの口琴のものなのか、どちらにも当てはまるのか。チャシヌマが上手に演奏したのはどちらなのか、両方なのかは、判然としない。

演奏鑑賞ののち、田辺は5曲の歌謡(1. エフンケー、2. ヤイカテカラ、3. ユーカラ2種、4. ハウキ、5. オイナー)を録音し⁽³⁰⁾、午後4時を過ぎたので、皆に引き止められるのを振り切って、榮浜(榮浜)への帰途に就く。その際、トンコリを「饞別としてアイヌが呉れた」ことが記されているので、LPの写真や、図版等に出てくるトンコリは、このとき入手したものとみて間違いはない⁽³¹⁾。金属製および竹製の口琴も、記述はないが、このとき入手した可能性は充分考えられる。

ここで「第十圖」に描かれている「ムックナ」2種、

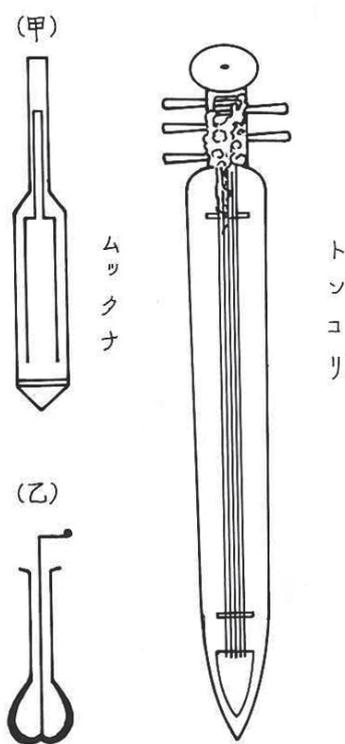


図8 LP「南洋・台湾・樺太諸民族の音楽」解説より、「トンコリ」と「ムックナ」(甲、乙)。(乙)が樺太アイヌの金属製の口琴[B-KA008_1978]。

図版提供：ユニバーサルミュージック合同会社

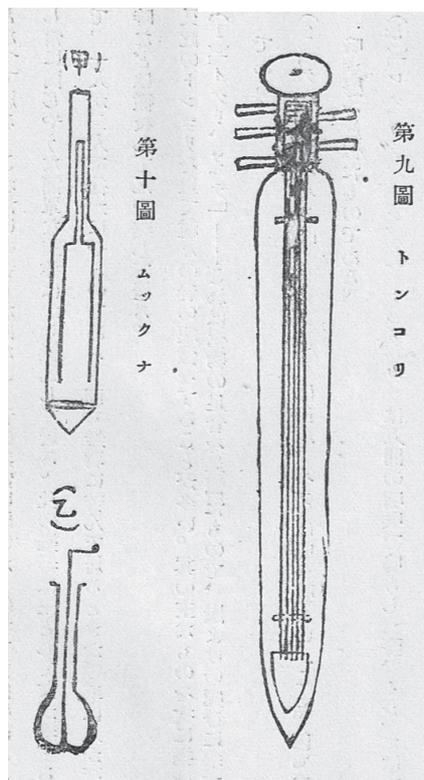


図9 田邊尚雄「島國の唄と踊り」より、「トンコリ」と「ムックナ」(甲、乙)。(乙)が樺太アイヌの金属製の口琴[B-KA008_1927]。

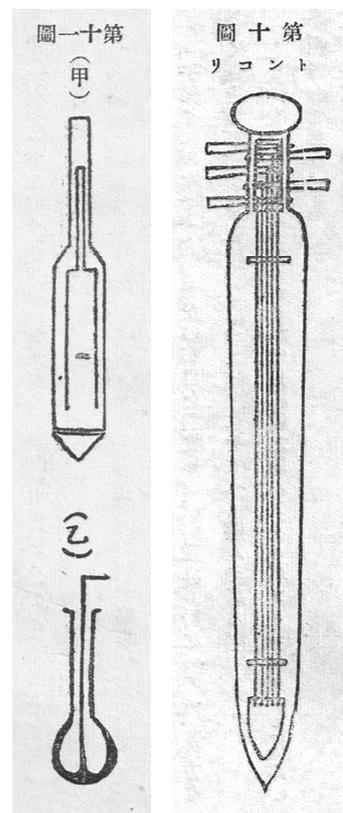


図10 田邊尚雄「日本音楽の研究」より、「トンコリ」と口琴二種。(乙)が樺太アイヌの金属製の口琴[B-KA008_1926]。原典では、二つの図に分かれている。また、「第十一圖」には、樂器名の記載はない(本文中にある)。

(28) [B-KA001]に関連して記載した「U. N. 姫」の「イレヘテ」(曲、演奏法)と共通しており、興味深い。

(29) 「海馬(トド)」がLPでは「海鳥」になっている。

(30) 田邊(1927:153-154)。この時の録音のうち1~4の4曲がLPに収められている。また、1と4は、谷本(2000)付属のCDに再録されている。

(31) 白濱で撮影された「トンコリの演奏」写真中の樂器が、京都のコレクションのものと同一かどうか(演奏されていたトンコリが、田辺に饞別として渡されたものか)についての論考は、三木(2006)参照。

すなわち「甲」(Aタイプ)・「乙」(Bタイプ)、そしてすぐ隣に配置された「第九圖」のトンコリ(図9)は、LP解説のイラストの下絵となったと考えられる。特に「乙」の金属製の口琴は、そっくりである。しかしながら、竹製の方は、微妙なバランス(特に杵と弁の幅の比)が異なり、またトンコリは、田邊(1927)では印刷汚れて潰れてしまっている糸倉付近の部分が、LPではぼかしていい加減に描いてあり、実物を知らない作図担当者が、田邊(1927)の挿絵からトレースを試みたことがわかる。

同じ楽器の「3点セット」を描いたイラストは、「島國」に一年先立って出版された「日本音楽の研究」(田邊1926)の「第二章 日本民族の原始的音楽」「一二、アイヌ人の音楽舞踊」⁽³²⁾にも登場する(図10)。こちらでは、「第十圖」と「第十一圖」の二つに分かれて異なるページに掲載されており、「第十圖」のトンコリは、糸倉部分がすっきりと描かれているだけでなく、糸巻に5本の糸がそれぞれ巻きつく様子まで丁寧に表現されている。とはいえ、実物を見ながら描いたにしては、筆致に迫力が乏しい。LPの写真と比べると、丸みを帯びた四角形(四角味を帯びた円形)の頭部が扁平に過ぎるし、注目すべき頭部の装飾の表現もなく、真白である(LPと田邊(1927)では、中央に黒点)。

「第十一圖」の「甲・乙」二種の口琴は、イラストには名称の記載がない(本文中に「ムクナ」として、田邊(1927)とほぼ同内容の記述がある)。竹製の口琴は、田邊(1927)のイラストとそれほど差がないが、金属製の口琴には、大きな違いが認められる。それは、杵の環状部底部が、中央が窪んだ「ハート形」ではなく、「フラスコ形」とでも言うような形に丸く表現されている点である。ただし、環状部の内側、振動弁の付け根あたりは、砂時計の砂のように盛り上がり描かれており、他の2点のイラストと同様、ニンクを思わせるような形状になっている。しかしながら、弁の最先端の丸まった表現は、かなり小さい。また、ここでも尾部の表現は全く見当たらず、いずれにせよ[B-KA007]を見てスケッチしたものとは思えない⁽³³⁾。

いったいどれを信じたらいいのだ、と考えあぐねていた時に、甲地氏に、田邊の樺太調査の一次資料たる「手帳」(フィールドノート)の存在を示唆された。1923年の調査時の、写真、交換された名刺、絵葉書、領収書な

どとともに、田邊秀雄氏から谷本一之・北海道立アイヌ民族文化研究センター所長(当時)に託され、後に北海道立北方民族博物館館長となった谷本氏によって同館に収蔵されたというのだ。しかも、手帳の内容を紹介・翻刻した研究論考が出版されているとのこと。それが、「北海道立北方民族博物館所蔵の田邊尚雄氏樺太調査関連資料について(1)、(2)」(篠原・笹倉2007、2008)であった。掲載誌の「北海道立北方民族博物館研究紀要」なら、毎号寄贈を受けているので、目は通していたのだが、当時はその重要性に気付かず、見過ごしていたのだ。

さっそく「資料紹介」とされた同論考を見ると、そこには、田邊がその目で楽器を見てスケッチした、原図が掲載されていた(図11、本稿では、同論考には掲載されていない、「手帳」の当該ページそのもののスキャンをご紹介します)。

決して上手とは言えないが、楽器の特徴をよく捉えて、短時間で描いたスケッチとしては、かなりの出来栄である。まず、竹の「ムクナ」は、他の資料では失われてしまった「引き紐を通す穴」の存在が確認できる(この穴が、田邊(1926)では、位置、形状ともに不可思議な横棒に化したものと思われる)。一応しっかりと基本的特徴を押さえたトンコリ。

そして、問題のBタイプの金属製⁽³⁴⁾の口琴である。全体に黒っぽくはつきりとは分らないが、杵の稜線が杵全体に通っているように描かれている(図12)。その特徴を以下に記述する。

- 1) 杵の環状部は円形に近い。
- 2) 環状部から腕部への入りは、なだらかではなく、鈍角ではあるが角度を伴う。
- 3) 二本の腕部の太さは、先端に行くに従って細くなるような表現ではない。
- 4) 下方の腕部が、先の方三分の一程度、外に開いている。
- 5) 腕部の最先端は、「空に向かって両掌を上げていよう」ような形には開いてはいないが、下方の腕部先端に、少々そのような表現が見られる。
- 6) 杵の稜線が杵全体に通っている。
- 7) 尾部は存在しない(ただし、環状部底部に、ホチキスの針の様なノイズが見える)。
- 8) 表裏どちらの側にホゾが切つてあるのか、イラストからは読み取ることができない。

(32) 目次で「アイヌ人の音楽舞踊」、本文(p.106)で「アイヌ人の音楽と舞踊」。

(33) 本文の方も、田邊(1926)では、田邊(1927)とは異なり、ギリヤークやオロッコに関する記述はなく、「テーマ」が異なるからではあるが、また、例えばアイヌ音楽に関するほとんど同じ内容の文章でも、細かい点でかなりの差異がある。例えば、田邊(1927)では過去形で書かれているのに対し、「研究」では現在形で書かれているなど。

(34) この「手帳」には、素材に関する記載はない。田邊は、ここにみた諸著作では、ウイльтаやニヅフのものを含め、「鉄」の語は用いず、「金属製」としている。



図11 田辺尚雄「手帳」に描かれた「ムックナ、トンコリ」と、金属製の口琴「アイヌ Jew's harp」[B-KA008_1923]。
図版提供：北海道立北方民族博物館

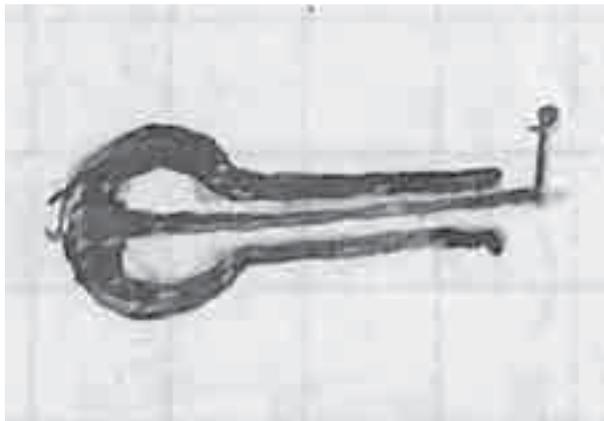


図12 田辺尚雄「手帳」に描かれた金属製の口琴「アイヌ Jew's harp」[B-KA008_1923]拡大図。
図版提供：北海道立北方民族博物館

- 9) 弁の付け根には、やはり山形の何かが存在しているように描かれている。
- 10) 弁は、中央あたりまでは次第に細く（幅が狭く）なるが、そのあとはあまり変わらない。
- 11) 弁と棒との隙間は、かなり広い。
- 12) 先端部は直角に曲げられ、
- 13) 最先端部は丸まっているような表現になっている。

基本的に田邊（1926）のイラストとよく似てはいる⁽³⁵⁾が、全体がそれほど華奢ではなく、ずんぐりして

いる点がまず異なる。5) の開きは、「手帳」では下側の腕部に控えめに見られるだけで、筆の滑りによる偶然の産物ともとれる。田邊（1926）の両腕部の先端の開きは、著書用にイラストを清書した人の「親切心」から描き加えられたものと思われる。

田辺の諸著作のイラストは、様々な人々の思い込みを吸い上げ、少しずつ姿を変えていったのは確認できた。

オリジナルのスケッチの登場のおかげで、ここに来てやっと、京都市立芸術大学所蔵の口琴[B-KA007]と、田辺が白濱で目にしたはずの口琴[B-KA008]との比較ができるわけだが、上掲の13箇所と比較ポイントのうち、まがりなりにも一致するのは、4)、5)、6)、11)、12)の5箇所。しかも、これだけの竹製の口琴やトンコリの絵が描ける人であれば見逃すはずのない、1)の環状部の形状の違い、7)の尾部の欠如といった、重大な相違点から客観的に判断を下すとすれば、「田辺が実際に目にして、スケッチした口琴と、現在京都にある口琴は、別物である」とせざるを得ない。

もうひとつ気になるのが、「手帳」における金属製の口琴の扱いである。竹製の「ムックナ」⁽³⁶⁾と「トンコリ」には、それぞれ頭に「1.」「2.」と番号がふられているのに、「アイヌ Jew's harp」とされる当該口琴には、番号がふられていない（この段階では、まだ「金属製のムックナ」ですらない）。また、竹製のムックナとトンコリの下には、ある程度のスペースが残っているにも関わらず、見開きの右ページ上方に、仲間外れのように描かれている。ここで生じるのが、このスケッチが、いつ描かれたのか、という問題である。調査時に、限られた時間でササッと描いたものなのか、すべての楽器を入手したのち、それらをゆっくりと観察しながら、あらためてスケッチしたのか。筆致から判断すると、前者である可能性が高いように思えるが、とすると、この「別扱い」は一体何なのか。

まったくの仮説であるが、もしかしたら、白濱では、竹のムックナとトンコリは入手したが、金属のムックナは、入手できなかったのではないか。それが、この「手帳」に反映されている、すなわち、「手帳」は、現地でのメモではなく、一旦落ち着いてから（例えば、その日の夜、宿で？）清書したもので、金属製の口琴のみは、記憶（あるいは別に存在したかもしれないメモスケッチ）を元に、別扱いで描いたのではないか。「手帳」に書かれている文字情報が、書き散らしてある状態ではな

(35) 画像が90度回転している点、弁の先端の直角の部分が逆を向いている点は、ここでは問題にしない。

(36) ここでのローマ字表記は「Mukkna」。

く、かなりまとめられている感じがするのも、この説を支えるのではないか⁽³⁷⁾。

あるいは、スケッチの楽器を入手したが、LPの写真撮影までの間に、紛失したのか。国会図書館に展示された、長さ140幅40の形状・存在ともに不明の樺太の口琴がそれではないか（ただし、尾部なしで140は、あり得ない大きさではないが、かなり大きい。問題の京都の口琴は、長さは同じ140（尾部を含む）でありながら、幅は35とわずかに狭い。この二つの「楽器」の異同をどう考えるべきなのか…。そして、2冊の著書～LP解説の図の段階に至るまで、尾部をイラストに加えなかったのは、「樺太の金属製の口琴には、尾部がない」というはっきりした証拠と記憶を田辺は一定期間、保持し続けたのではないか。手元の（現在京都にある）楽器を見ながら、著書のために新たにスケッチをし直すとするれば、尾部や環状部などの特徴を修正しない訳がない。にもかかわらず、それをしなかった（あるいは、指示・指摘しなかった）のはなぜか。

さて、では果たして、実物資料として存在する、この京都の口琴はどこから来たのか？

ひとつのヒントが、「図録」p. 128に記載のある「この口琴は、『びやぼん』というメモが添付されていた」という事実（三木 2006）かもしれない。本州以南のびやぼんの、非常に珍しい遺物なのか⁽³⁸⁾。しかしながら、このメモは、現代日本語で「口琴」という程度の意味で田辺がつけたものかも知れず、また、どこかに同形の日本の江戸～明治にかけてのびやぼんの実物や、その図像が残されているわけでもない。

せめて1曲でも金属の口琴の演奏を録音してあれば、その音程や音色といった、別の面から、同一楽器かどうかの判断がついたかも知れない⁽³⁹⁾。

いずれにしても、「手帳」のスケッチそっくりの楽器が、田辺コレクション中に確認できない以上、LPのジャケット裏の写真で田辺親子によって（？）「樺太」「樺太アイヌ」と「認定」されているこの口琴は、その判断に従って扱うしかない。とはいえ、この「認定」は、田辺自身のフィールドノートのスケッチによって、「同一の楽器についての言及ではない」可能性が非常に高くなる、という矛盾を抱える。ただし、「樺太アイヌの口琴である」ことが完全否定される訳ではない（白濱で見た、尾

部のない丸いものはとは別に、同旅行中に樺太の他の地、あるいはその後どこかで入手した可能性もないとは言えない…。このような、非常に弱い根拠による「樺太アイヌの口琴」が[B-KA007]なのであった。

もしも、「[B-KA007]の入手経緯が判明した」、「[B-KA007]と全く同じ形状の口琴が、世界の別の民族のものとして存在する」、「田辺コレクション中に、スケッチされた口琴[B-KA008]そのものが見つかった」などといった、確たる証拠や反証が出てきた時には、あらためてこの口琴には、身の振り方を考えていただくしかない。

6 サハリン州郷土博物館 [B-KA009]

「日本国内の博物館」という今回のテーマからは外れるが、サハリン州郷土博物館に展示されている金属製の口琴も紹介しておく（図13）。1992年4月にサハリンを訪問した際に目にした、比較的大型の、金属製のBタイプのもので、木製のケース入り。ケースの表裏には、見事な彫刻が施されている。楽器としても、かなり精巧なものであるように見える。枠全体に稜線が通っており、環状部はしずく形、弁の接合は、枠の表側。おそらく鉄製。

展示ケースの外からの目視によるスケッチをもとにした計測では、ケースの全長は160、幅40、高さ20ほど。蓋の開閉のシステムは、振動弁の先端より少し離れた位置に取り付けられた木釘を中心に、スライド回転させるスタイルで、[B-KA001]とは回転軸の位置が異なる。楽器自体の長さは、腕部先端が蓋の下に隠れて見えないが、90～100ほどか。

すぐ近くには、「アイヌのトンコリ *тонкори*」と、「ニヴフの楽器」（一弦の擦弦楽器トインリン、いわゆるウマトンコリ）が、キャプション付きで展示されていたが、当時この口琴にはキャプションがなかった。

ケースの彫刻の様式から見て、樺太アイヌのものと思われるが、実際にはどこのものとされているのか、いつごろの収集なのか、旧樺太庁博物館の収集品なのかどうか、公式な採寸などは、現時点では不明。図録や目録は公開されているのだろうか。今後、機会を見て、同博物館に詳細を問い合わせたい⁽⁴⁰⁾。

(37) この説の検証には、同「手帳」の他の個所の筆致、記載の順序などを詳細に調査する必要があるだろう。

(38) 実物資料としてのびやぼんは、現在、個人蔵のものが1点確認されるのみ（直川 2005）。イラストや記述は、ある程度の情報が存在している（関根 1990、2009）。

(39) 田邊（1927）の記載（注（30）参照）とは異なり、「手帳」では「初め踊り、三つ、後唄、楽器、之を種々吹込み」という記述（篠原・笹倉 2007）があり、楽器の録音が行われた可能性を示している。

(40) 2016年2月17日から20日の間にサハリン州郷土博物館を訪問した小川正人氏の情報によれば、この口琴は、『19世紀末から20世紀初頭のサハリンのニヴフの白樺皮製品』の関連品として、ニヴフ語の口琴の呼称『ザーカンガ *заканга*』のキャプションを付し、ケースから取り出された状態で展示されていた。



図13 サハリン州郷土博物館蔵、樺太アイヌ?の金属製の口琴[B-KA009]。
1992年、筆者撮影



図14 杉山寿栄男コレクションの、樺太アイヌの鉄製の口琴[B-KA010]ほか。「アイヌ藝術 木工篇」(金田一・杉山 1942 (新装版 1998))より。
図版提供:北海道出版企画センター

7 杉山寿栄男コレクション [B-KA010]

ほかに樺太アイヌの金属製のBタイプの口琴が存在した証拠として、杉山寿栄男のコレクションを紹介した「アイヌ藝術 木工篇」(金田一・杉山 1942)の「圖版五二 アイヌの樂器類」中に、「鐵製口琵琶 kani mukku, jew's harp made of iron」の写真が見える(図14)。

[B-KA001]と比較的似ているが、杵が少々ごつい。杵全体に稜線が通っており、環状部はしずく形、環状部から腕部への入りはなだらかで、弁の接合は、杵の表側。真上からの写真のため、弁の先端の様子は不明。杵と弁との隙間は、ある程度精密に成形されており、樂器として優れたものと思われる。

採寸は記載されていない。隣の「竹製口琵琶 mukku」が、現代の一般的なムックリの長さ約150と同じ⁽⁴¹⁾だと仮定して、それより少々短い程度に見える。ただし、この二つの樂器が同じ一画面に撮影された写真だとする根拠は全くない(強いて言えば、竹の口琴の紐の位置がうまく重ならないように配置されており、可能性としてはあり)ので、サイズは不明。図中にはほかに、「鹿笛 ipapkeni」、「太鼓 kacho」(片面のフレームドラムとバチ、ガラガラ2本)、「竪琴 tonkori」3本(3弦と5弦のトンコリと、1弦のいわゆる「ウマトンコリ」)が見えるが、それぞれの縮尺関係も不明である。

解説本文中に「樺太アイヌ特有のカネムツク(kani mukku)は金属製で、これ又中心の薄い舌状の金の振動によるもので、この種は明治時代内地にあつて、その音律からビヤボンと云ふ明治時代の子供達の樂器であつた。」との記載がある。

この樂器が現存しているとすれば、一番可能性が高いのは、宮城県多賀城市にある、東北歴史博物館の杉山コレクション「アイヌ民族資料」中である。東京で図案家としての職業のかたわら考古学・民俗学を中心に研究を行い、収集した総数は数万点に達したといわれる杉山のアイヌ資料ではあるが、1945年の空襲で大半が焼失。同館に所蔵されているのは、被災を免れ、疎開先の石巻市に移され、1995年に寄贈された資料約1,500点とのことである⁽⁴²⁾。その存在を同館に問い合わせたが、学芸部学芸班長の及川規氏からの回答では、同館が所蔵しているのは、主に宝刀や刀装具類で、樂器類はない、とのことであつた(2016年2月2日私信)。

(41) 手元にあるムックリをいくつか計測。古いものは全長140、新しいものは165のものもあるが、150が多い。歴史的なものには、東京国立博物館の「ムックリ」133(東京国立博物館編 1992)などの小型のものから、サント・ペテルブルグのロシア民族学博物館の、1912年に南樺太、サハリン島南岸のタラントマリで収集された「ムックナ」190(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2005)、サント・ペテルブルグのロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館の、1903年にピウスツキによって、同じく南西海岸のマウカで収集された「ムフクン/ムックル」197(公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2013)など、大型のものもある。

(42) 東北歴史博物館「杉山コレクション アイヌ民族資料・刀装具」展示に関するページより。http://www.thm.pref.miyagi.jp/exhibition/detail.php?data_id=751 (アクセス日:2016年1月1日)。

8 マンロー コレクション [B-KA011]

現在所在不明の樺太アイヌの金属製のBタイプの口琴のもうひとつが、「アイヌの生活文化」(鷹部屋 1942: 78)の写真「アイヌの楽器」に見える(図15)。

その形は、腕部の先端へ行くほど、細くなっており、杵全体に稜線が通っている。環状部はしずく形で、全長に比してかなり小さい。横幅もあまりないので、華奢な印象を受ける。しかしながら、隣に下げられた竹製の「ムックリ」の本体よりも長いので、長さは150を超える可能性も。写真が小さいため、弁の接合は不明だが、杵の表側か。また、真上からの写真のため、弁の先端の様子は不明。とはいえ、音にも十分な注意を払った、精巧な楽器のようである。断定は禁物だが、おそらく鉄製だろう。

木製のケースも写っており、蓋の表面には、四つ目編みの籠目を模した彫刻が見られる。[B-KA001]と同様、杵の底部側の、突き出した部分の木釘(?)を回転軸に、横にスライドさせて開閉する。

この写真には、他に、トンコリと、フレームドラム、そしてそのバチ(反りを伴った一本の棒)と一緒に写っている。

写真のキャプション「ムックリ(竹製)」は、何故かトンコリの真下、誤解を招くような場所に位置しており、その右下に、解説として「五弦琴はトンコリ又はカーといふ。太鼓『カチャー』と共に樺太からの渡来である。(満郎博士蔵)」とある(金属製の口琴とそのケースに関しては、何の言及もない)。ニール・ゴードン・マンローのコレクションであることがわかる。トンコリと「カチャー」が、「樺太アイヌのもの」なのか、「樺太アイヌから北海道アイヌに伝来したもの」なのか、今一つ不明確であるが、おそらく前者だろう。しかしながら、金属と竹の口琴に関しては、そのような記述もない。同じ写真に写っているから、おそらく樺太アイヌのものだと推測するしかない。ただし、キャプション「ムックリ」は北海道アイヌ語である。

このトンコリと「カチャー」は、「わがマンロー伝」(桑原 1983: 247)の「ヴァイオリン演奏を楽しむマンロー。壁面を飾るのは貴重なコレクション」と題された写真にも登場する。ここでは口琴は、金属のものも竹のものも、どちらも小さすぎて(?)確認できないが、このような雰囲気のところコレクションされていたのは間違いなさそうである。

なお、これらの楽器のうち、トンコリと「カチャー」



図15 マンロー コレクションの樺太アイヌの金属製の口琴[B-KA011]ほか。「アイヌの生活文化」(鷹部屋1942)より。

は、図録「海を渡ったアイヌの工芸 英国人医師マンローのコレクションから」(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2002: 119)を見ると、開拓記念館の所蔵となっている。「マンローの死後、江別市にある酪農学園大学を経て、寄託を受けたもの」(出利葉浩司 2002 同図録解説 p.108)とある。図録では、写真撮影の角度や、楽器の状態が鷹部屋の著作中の写真とは異なる(開拓記念館所蔵の「630 トンコリ」の糸巻五本のうち一本の欠如、「629 樺太アイヌのシャマンが使う太鼓とばち」の膜面の破れの修復など)が、他の多くの特徴が一致するので、同じ楽器と見てよいようだ。

また、断定はできないが、図録中の開拓記念館所蔵の「627 ムックリ」(全長138)⁽⁴³⁾も、鷹部屋(1942)の写真の「ムックリ」とよく似ている。国立スコットランド博物館蔵とされる、161、162の2本の「ムックリ」も同図録に鮮明な写真が掲載されているが、杵の広い方の端の節の具合、弁の「肩」の様子などから、開拓記念館所蔵のマンローのムックリの方が、同一物である可能性が高い。

(43)「収蔵番号27174」から、これが北海道開拓記念館編(1981)中の「整理番号3546」の「酪農大学」のムックリであることは確実だが、全長は同図録では138となっており、2mm長い。

一葉の写真に撮影された楽器4点（バチやケースも別に数えると6点）のうち、3点（同4点）が開拓記念館（現北海道博物館）に収蔵されているならば、金属製の口琴とそのケースも同じ道を辿ったのではないか。あるいは、国立スコットランド博物館のほか、大英博物館、オックスフォード大学ピットリバーズ博物館など、マンローのコレクションを所蔵する他館に、もしかしたらあるのではないか。特に、「国立スコットランド博物館の資料に『模様』をもつものが多いのに対して、記念館の資料には、マンローの別のこだわりが感じられる」（出利葉 同上）とのことなので、収集年代にもよるが、この、美しい彫刻がケースに施された口琴は、エディンバラにあるのかも知れない…。

念のため、北海道博物館アイヌ民族文化研究センターに再調査をお願いし、出利葉氏らがあらためて捜して下さったが、金属製の口琴は確認できなかったとのことである（2016年2月2日 同館小川氏からの報告による）。この口琴は一体どこにあるのか。発見を期待したい。

9 国立民族学博物館 [B-HA001]

ここで、北海道アイヌの金属製の口琴についても、その存在を確認しておきたい。竹製のAタイプの紐で引く口琴ムックリ（ムックリ、ムックル）が隆盛な北海道アイヌの間にも、金属製のBタイプの口琴がある／あったことは知られている。しかしながら、その具体的な情報は非常に限られており、例えば、谷本は「アイヌの口琴」の中で、「鉄口琴（ルビ：カニムックリ）」は、大陸からの輸入であると結論付けつつ、「北海道では（あらゆる面で樺太の影響を強く受けている）宗谷付近にみられるだけで、一般的に用いられるものではなかったようである」とし（谷本 1960：75-76）、また40年後の「アイヌ絵を聴く」でも、「樺太でもアイヌの人々はあまり使っていなかったようであり、旧記にも、調査でも、樺太からこの鉄口琴が北海道に入ってきて、広く演奏されていたことを示す形跡はない」としている（谷本 2000：306）。筆者のこれまでの調査の経験上からも、北海道アイヌの金属製のBタイプの口琴の情報に出会うことは非常に希であり、「特殊なもの」という印象であった⁽⁴⁴⁾。

実物資料、特に博物館が所蔵しているものに関しても、

これまでほとんど情報はなかった。ただ、「びやぼんノート」（可児 1965）という半世紀ほど前の資料に、「東大人類学教室所蔵、F三四五⁽⁴⁵⁾、北海道アイヌの口琴は、全長九糎、簧末一糎が直角にまがっている。その形態は、柄がなく、杵頂部が環状になり、一見してヨーロッパのユダヤ堅琴に似ている。」という一節があり、その出典として「内外土俗品図集 第12輯」（長谷部編 1935）を挙げている。「ユダヤ堅琴」の語に関しては、今となつては議論する余地もない誤訳であるが、Bタイプの口琴の具体的な記述としては注目に値するものである。

情報に基づき、この機会に「内外土俗品図集 第12輯」を見てみると、その「圖版 一七二」に、「樺太オロッコ、臺灣、サタウル島⁽⁴⁶⁾、泰国、ジャバ⁽⁴⁷⁾」の竹製のAタイプの口琴に混じり、金属（鉄）製のBタイプの口琴（番号949）があるのが確認できた（図16）。

「解説」には「949 口琴 F-354」として、下記の記載がある。

「長さ 九糎」

「北海道アイヌ使用品。鐵線を曲げて杓子状につくり、その頂より兩脚の中間に挟まるように一本の鐵線をつけて振動瓣となす。瓣の先端一糎餘は直角に曲げてある。兩脚の先端を齒にておさへ、右手拇指にて振動瓣の先端を弾く。本品の如き型の鐵製口琴は支那、チベット、シャム等にも多くみられると云ふ。」

早速東大に連絡をとってみようと思うが、その前にインターネットで少々探ってみると、これらの楽器を含む東大の資料コレクションは、国立民族学博物館（民博）に引き継がれ、資料情報などの再検討がおこなわれていることがわかった（齋藤 2013、2015）。

この共同研究の代表の齋藤玲子氏とは、今年（2016年）3月の、民博のアイヌ文化展示のリニューアルに向けて、展示場で視聴可能なムックリの音源に関して、丁度やりとりしている最中であつたので、早速問い合わせしてみると、当該口琴は、確かに民博が所蔵しており、リニューアルで展示に出すべく、準備している最中だ、とのことである。何というタイミング。

しかも、口琴の情報は、インターネットに公開されている、とのことで、早速、民博の標本資料目録データベース（下記）で検索してみると、様々な角度から撮影された、大きなカラー写真6葉も見られるようになって

(44) 反対に、北原は、「金属製のムックルはカニムックルと呼ばれます。こちらは現在あまり知られていませんが、明治期に生まれたエカシやフチの中には、ムックルと言え金属製のものしか知らないという方もおられました。」（北原 2015）としている。同氏に確認したところ、例えば静内の織田ステノ氏は、「金属口琴は元々見たことがあり、竹製口琴は白老に行つて初めて見たとおっしゃっていた」とのこと（2016年2月3日私信）であり、他にも「北海道の方」でそのような人がいたそうである（2016年1月28日私信）。

(45) 原典（長谷部言人編 1935）によれば、番号は正しくは、「F-354」。齋藤玲子氏のご指摘による。

(46) ミクロネシア連邦ヤップ州。

(47) インドネシア、ジャワ。



図16 旧東大人類学教室所蔵の口琴コレクション。左下が、北海道アイヌの鉄製の口琴[B-HA001]。「内外土俗品図集 第12集」(長谷部編 1939)より。



図17 国立民族学博物館所蔵、北海道アイヌの鉄製の口琴[B-HA001]。
図版提供：国立民族学博物館

いた。受け入れ年度は、1975年となっている。

http://htq.minpaku.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000028mocat の検索画面から「標本番号：K0001933」を検索（アクセス日：2016年1月1日）。

齋藤氏によれば、「1884年のカタログ」⁽⁴⁸⁾に、根室で収集された「Kuchibiwa (Musical instrument of Ino)」というのがある（Inoはおそらくアイヌ）、同じものの可能性があるそうで、同一資料であれば、「東大資料のなかでも古いもので、年代のわかるアイヌ資料としても、貴重です。」（2016年1月22日私信）とのことであった。

しかもこの口琴は、同データベースによれば、[B-KA001]の最後にも採り上げた、図録「千島・樺太・北海道 アイヌのくらし：ドイツコレクションを中心に」（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2011）にも、「資料番号：334、アイヌ語名称：カニムックル、日本語名称：口琴、地域：北海道アイヌ 根室、年代：—（情報なしの意、p. 10「凡例」による）」として、すでに掲載されていたのであった。直前の「資料番号：333」には、「内外土俗品図集 第12輯」で「樺太オロッコ族」のものとして隣に写っていた、長い引き棒を持つ、竹製のAタイプの口琴が、「樺太アイヌ」の「ムククン／ムククナ」として登場している。

民博のデータベースではアイヌ語名称の記載されていない鉄製の口琴を、どのような理由で図録では「カニムックル」としたのかは定かではないが、図録巻末の「出品資料リスト」ではこの口琴のサイズは「最大長93、最大幅36、最大高21、厚5」であり「備考⁽⁴⁹⁾：『びわぼん』」となっている。一方の、データベースでは「撮影・計測日：1996-04-01」のデータとして、「幅：36×奥行：93×高さ：18 / 24 g」が記載されている（高さに少々のズレがあるが、全長と幅は同じである）。

写真（図17）を見た限りでは、枠全体に稜線が通っているが、特に環状部での稜線のありかたは、正確な◆（断面）でも■でもなく、その中間的な、傾いた、少々上に開いたような、いびつな状態になっている。環状部は円形、環状部から腕部への入りは、角度を伴っており、腕部の先端へ行くほど、ほんのわずかに細く（幅が狭く）なる。弁の接合は、枠の裏側で、ホゾに入れてカシメてあるだけではなく、白老の[B-KA002]～[B-KA005]と同じく、ロウ付けのような付加接着が施されているようで、変色が見られる⁽⁵⁰⁾。

弁の最先端は、丁寧に丸めてある。直角の部分も、それほどアールを伴わずに曲げてあり、焼き戻し・焼きなましなどの技術を駆使して作業してある模様。ただし、それにしても、弁のエッジが切られてなく、枠との隙間も広すぎる。見た目はまあまあだが、楽器としてはそれ

(48) 齋藤（2015）中に挙げられている、Department of Science, University of Tokio 1884 “Catalogue of archaeological specimens with some of recent origin”。

(49) 「備考」は、図録のp.10「凡例」では「収集者が記録した現地の呼称等」だが、巻末の「出品資料リスト」では「(原資料名)」とされている。

(50) 楽器裏面、接合部の写真は公開されていなかったため、齋藤氏に依頼して送っていただいた。展示は、接合部が見える状態で行われる予定。

ほど高品質ではないと思われる。

10 映像資料「北方民族の楽器」[B-HA002]

本稿の最後に、実物資料ではないが、映像に残された、貴重な演奏場面を伴う「北海道アイヌの」Bタイプの金属製の口琴の情報を挙げておく。

NHK が1964年に制作した更科源蔵監修「北方民族の楽器」がそれで、樺太アイヌの杵太鼓「カチョ」⁽⁵¹⁾、ヨブスマソウを吹き鳴らす（吸い鳴らす）「チレット・クツタル」、テンキグサの葉の口腔共鳴パーカッション「マタチ・ムクン」、「トンコリ」をはじめ、ギリヤークの一弦の擦弦楽器「トンコルン」や丸太を叩く「チャチャハシ」、オロッコの杵太鼓（名称の言及なし）や、ガラガラ「ヨードプ」など、主に樺太に住む民族の、ユニークな楽器とその実演を紹介している。演奏の音は全て、別録音のものを当ててあると思われる、映像中の楽器そのものの音かどうか不明だが、それでも非常に貴重な資料であることに変わりはない。

この中で、竹製の「ムックリ」と、金属製の「カニムックリ」を演奏するアイヌ民族の女性が登場する。この奏者が、北海道アイヌなのか、樺太アイヌなのかは明確に言及されていないが、ナレーション中に「鉄で作られたカニムックリは、樺太を通して大陸から伝えられ、また一部は日本内地からも入ったようである。」とされているので、楽器も演奏者も、北海道の物／人である可能性が高い⁽⁵²⁾。音程はC#より少々高めで、余韻が短い。



図18 映像資料「北方民族の楽器」（更科監修 1964）より、北海道アイヌの金属製の口琴[B-HA002]。
図版提供：北海道立図書館

楽器そのものは、手で持って、カメラに見せる貴重なシーンが数秒あり、ある程度の観察が可能である（図18）。杵全体に稜線が通ったもので、環状部は円形。環状部から腕部への入りは、ある程度の角度を伴っており、環状部から腕部の途中三分の二あたりまではほぼ同じ大きさだが、そこから先は、先端へ行くほど、わずかに、外側に円弧状に膨らみをもちつつ、細くなる。

弁の接合は、杵の裏側で、弁の先端は、大きなアールを伴って、ごくわずかに上方に持ち上げられているだけ、最先端は丸めてないように見える。

弁のエッジは観察不可能だが、弁と杵との隙間は、かなり狭く、精密に作られている感がある。しかしながら、弁は硬く、弾力に欠けるようで、音の伸びもなく、楽器の大きさの割に音程は高め。

ナレーションでは「これを伴奏楽器にして、踊りを踊ったことが記録に残っている」としているが、「天塩日誌」（松浦 1861）の、竹製の「ムックリ」に関する記述を、流用したものだろうか。鉄製のBタイプの口琴を伴奏に、踊りを踊ったという記述を、あらためて追う必要がある。

11 おわりに

今回の調査の結果、日本国内の博物館には、「樺太アイヌの金属製の口琴」とされる資料は、四館に合計7点の所蔵が確認された。加えて、サハリンの博物館に1点（要詳細確認）があり、また、文献に写真が掲載されているものの、現在所在のわからないものが2点。スケッチが残っているものの、所在のわからないものが1点ある。

「北海道アイヌの金属口琴」とされる資料は、一館に1点所蔵されており、また、演奏シーンを含む1件の映像資料の情報があることが確認された。

今回洗い出した、鉄か別の金属なのかという素材の問題や、同一口琴のサイズが、出版物によってズレている件などは、あらためて全ての口琴を、同一基準で測定し直し、決定版を出す必要があるだろう。

本稿では、基本情報の確認と、矛盾点の洗い出しに労力を取られ、大局的な見地からの考察に大きく踏み込むことができなかった。樺太アイヌの金属製のBタイプの口琴だけに限っても、歴史的な報告や言及、描かれた画像の再検証がまだであるし、竹製のAタイプの口琴との

(51) 樺太アイヌの楽器の呼称は、カタカナ表記は、更科による「アイヌ民族誌」（アイヌ文化保存対策協議会編 1970）による。ギリヤークとオロッコの楽器名は、ナレーションの聞き取りである。

(52) 北原は北原（2015）の記事の中で、同映像中に「屈斜路の方が演奏している様子が取られています。」としている。その根拠について問い合わせたところ、弟子屈町が所蔵する更科源蔵資料の中に、番組の台本のようなものがあったとのことで、近日中に確認して下さる、との回答を北原氏よりいただいた（2016年2月26日）。
なおこの女性は、更科の著作「歴史と民俗 アイヌ」（1968）にも、ムックリを演奏している写真がアップで掲載されている。

関係性や、呼称、演奏法の検証も必要である。

また、多くの場合、鉄製の道具であるので、刃物を含む鍛冶、シャマニズムとの関わりについても検証する必要もある⁽⁵³⁾が、今回は手が回らなかった。

さらに、本州以南の日本の口琴文化との関係を探る中で、アイヌ側、アイヌ研究者側からみた和人／日本の口琴「びやぼん」への言及を捉えなおしてみると、新しいものが見えてくるのではないだろうか。また、大陸から樺太、北海道、本州という流れの話ばかり多く目につくが、埼玉県大宮市（当時）の氷川神社東遺跡で発掘された、2本の鉄製のものと、2015年11月に情報が公開された、埼玉県羽生市の屋敷裏遺跡出土のものが、現時点では世界で最も古いBタイプの鉄製口琴⁽⁵⁴⁾（10世紀前半、平安時代）であり、渤海、日本、蝦夷という、環北日本の逆回転の流れも検討の必要があるのではないか。

そして、樺太アイヌの金属製の口琴の「源流」を求めて、北隣のウイльта、ニヴフ、そしてウリチ、ナーナイ、ウデへ、ダフル、サハなどの諸民族の現代の口琴文化を探る作業と、これらの民族に散見される、ユニークな「斧や金槌に口琴を当てる」奏法の探求など、テーマは尽きないが、これらはまた、別の機会に検証していきたい。

謝辞

口琴をこの世に生み出し、演奏し、様々なかたちで現代に伝えてくださった／くださっている方々に感謝します。図版を快く提供して下さった各博物館、出版各社、北海道立図書館、図版の使用を許諾くださった、田辺尚雄・秀雄両氏のご遺族である東樹和子、田邊光夫の両氏にお礼を申し上げます。

また、弟子シギ子、磯嶋恵美子、今井ノリ子、山本栄子、鈴木紀美代、八幡巴絵（アイヌ民族博物館）、内田祐一（文化庁文化財部伝統文化課）、北原次郎太（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）、大矢京右（市立函館博物館）、小島美子、三木俊治、高橋直己、篠原智花、笹倉いる美（北海道立北方民族博物館）、木原ひとみ（アイヌ文化交流センター）、小笠原小夜（同）、及川規（東北歴史博物館）、齋藤玲子（国立民族学博物館）、千葉伸彦、そして小川正人（北海道博物館）、出利葉浩司（同）、甲地利恵（同）各氏をはじめ、数えきれない方々のご助力、情報提供に感謝します。

参考文献

アイヌ文化保存対策協議会編、児玉作左衛門・犬飼哲夫・高倉新一郎監修 1970. アイヌ民族誌. 第一法規出版株式会社.

- 長谷部言人編 1939. 内外土俗品図集 第12輯. 寶雲舎.
- 北海道開拓記念館編 1973a. 民族調査報告書 資料編I. 北海道開拓記念館調査報告 2.
- 北海道開拓記念館編 1973b. 民族調査報告書 資料編II. 北海道開拓記念館調査報告 5.
- 北海道開拓記念館編 1978. 先住の人びと 常設展示解説書 2. 北海道開拓記念館.
- 北海道開拓記念館編 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1 民族I. 北海道開拓記念館友の会.
- 伊藤裕満、内田祐一、東敦美編 1985. 第2回企画展 北方民族展—ウイльта・ニヴヒ・千島アイヌ・樺太アイヌ—. (財)白老民族文化伝承保存財団.
- 可児弘明 1965. びやぼんノート. 史学 38(2): 97(251)-108(262).
- 金田一京介・杉山寿栄男 1942 (新装版 1998). アイヌ藝術 木工篇. 北海道出版企画センター.
- 北原次郎太 2006. へまた・てまな 鉄のムックル. コタンメール 24:2. 財団法人アイヌ民族博物館. http://www.ainu-museum.or.jp/info/kotanmail/kotanmail_24.pdf (アクセス日:2016年1月1日).
- 北原次郎太 2015. 《シンリッウレシバ(祖先の暮らし)》第5回 北方の楽器たち(2). 月刊シロロ 7月号. アイヌ民族博物館. <http://www.ainu-museum.or.jp/siror/monthly/201507.html#01> (アクセス日:2016年2月26日).
- 小林幸男 1988. 奏でてみよう、アイヌの楽器《ムックン》. 日本伝統音楽芸能研究会編. 日本の音IV 楽器の音楽. 邦楽百科入門シリーズ カセットブック. pp. 246-252. 音楽之友社.
- 国立国会図書館編 1950. 音楽文化資料展覧会目録. 国立国会図書館.
- 甲地利恵 2011. アイヌ音楽の録音・録画のあゆみ 第1回「音楽学者・田辺尚雄氏による樺太アイヌ音楽の録音(1)」. http://ainu-center.hm.pref.hokkaido.lg.jp/11_02_001.htm (アクセス日:2016年1月1日).
- 甲地利恵 2012. アイヌ音楽の録音・録画のあゆみ 第2回「音楽学者・田辺尚雄氏による樺太アイヌ音楽の録音(2)」. http://ainu-center.hm.pref.hokkaido.lg.jp/11_02_002.htm (アクセス日:2016年1月1日).
- 河野本道 1966. Aynuの口琴(Mukkuri)の比較資料——Afghanistanに於ける一例——. 北海道の文化 10:25-35.
- 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2013. ロシアが見たアイヌ文化 ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学博物館のコレクションより. 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構.
- 桑原千代子 1983 わがマンロー伝—ある英人医師・アイヌ研究家の生涯. 新宿書房.
- 京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 収蔵資料検索データベースARTIZE 田邊氏寄贈コレクション「カニ・ムフクナ」. http://neptune.kcu.ac.jp/cgi-bin/kyogei/index_tanabe.cgi (アクセス日:2016年1月1日).

(53) 「マキリー—身近なる利器」(佐々木 2001: 108-121) ほか参照。

(54) Aタイプの口琴で最古のものは、中国内蒙古自治区の夏家店上層文化の遺跡で発掘された紀元前8〜4世紀の骨製口琴。

- [京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター編] 2006. 田邊尚雄・秀雄旧蔵 楽器コレクション図録. 京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター.
- 松浦武四郎 1861. 天塩日誌. 吉田武三編 1977. 松浦武四郎紀行集 下. pp. 491-531. 富山房.
- 三木俊治 2006. 田邊尚雄・秀雄の足跡と楽器群. 田邊尚雄・秀雄旧蔵 楽器コレクション図録. 京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター. pp. 97-154.
- 日本放送協会編 1965. アイヌ伝統音楽. 日本放送出版協会.
- Sachs, Curt 1917. Die Maultrommel: eine typologische Vorstudie. Zeitschrift für Ethnologie, 49 :184-202.
- [埼玉県立博物館編] 1972. アイヌ文化展 展示品図録. 埼玉県立博物館.
- 齋藤玲子 2013. 日本北部周辺の先住民族資料の理解のために. 民博通信 141:18-19.
- 齋藤玲子 2015. 坪井正五郎によるアイヌ民族資料の収集. 民博通信 150:18-19.
- 更科源蔵 1968. 歴史と民俗 アイヌ. 社会思想社.
- 更科源蔵監修 1964. 北方民族の楽器. NHK放送文化財ライブラリー.
- 佐々木利和 2001. アイヌ文化誌ノート. 吉川弘文館.
- 関根秀樹 1990. 幻の江戸口琴「びやぼん」. 口琴ジャーナル 1:22-25. 日本口琴協会.
- 関根秀樹 2009. 幻の口琴「びやぼん」と江戸のサロン文化. 2008年度東京音楽大学付属民族音楽研究所公開講座 発表資料.
- 篠原智花・笹倉いる美 2007. 北海道立北方民族博物館所蔵の田邊尚雄氏樺太調査関連資料について(1). 北海道立北方民族博物館研究紀要 16: 77-98.
- 篠原智花・笹倉いる美 2008. 北海道立北方民族博物館所蔵の田邊尚雄氏樺太調査関連資料について(2). 北海道立北方民族博物館研究紀要 17: 59-72.
- 直川礼緒 1992. サハリンに口琴を訪ねて. 口琴ジャーナル 5: 10-11. 日本口琴協会.
- 直川礼緒 1994. 日本の口琴の源流. 小島美子・藤井知昭編. 日本の音の文化. pp. 465-484. 第一書房.
- 直川礼緒 2005. 口琴のひびく世界. 日本口琴協会.
- 鷹部屋福平 1942. アイヌの生活文化. アルス.
- 田邊尚雄 1926. 日本音楽の研究. 京文社.
- 田邊尚雄 1927. 島國の唄と踊. 磯部甲陽堂.
- 田邊尚雄(録音・調査). 田辺秀雄(企画・監修) 1978. 南洋・台湾・樺太諸民族の音楽. 東芝EMI株式会社.
- 谷本一之 1960. アイヌの口琴. 北方文化研究報告 15: 63-77.
- 谷本一之 2000. アイヌ絵を聴く 変容の民族音楽誌. 北海道大学図書刊行会.
- 東京国立博物館編 1992. 東京国立博物館図版目録 アイヌ民族資料篇. 東京美術.
- 山崎美成・谷文晁・曲亭馬琴ほか 1824. 耽奇漫録 第八集.
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2000. 馬場・児玉コレクションにみる 北の民 アイヌの世界. 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構.
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2002. 海を渡ったアイヌの工芸 英国人医師マンローのコレクションから. 北海道開拓記念館・開拓の村文化振興会.
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2004. 樺太アイヌ民族誌 一工芸に見る技と匠一. 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構.
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2005. ロシア民族学博物館アイヌ資料展 ーロシアが見た島国の人びとー. 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構.
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2008. アイヌの工芸 ーペンシルバニア大学考古学人類学博物館ヒラリーコレクションー. 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構.
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2010. アイヌ ー美を求める心. 川崎市市民ミュージアム.
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2011. 千島・樺太・北海道 アイヌのくらし: ドイツコレクションを中心に. 財団法人千里文化財団.
- 財団法人アイヌ民族博物館 1991. アイヌ民族博物館 児玉資料目録II. 財団法人アイヌ民族博物館.

※[編著者]は、編著者が明記されていないもの。

Metal Jew's Harps of the Sakhalin (Karafuto) Ainu in the Collections of Japanese Museums

Leo TADAGAWA

So far, it is known that seven bow-shaped Jew's harps made of metal (five of them are iron and two of them are probably iron) *kani-muhkun* (*kani-muxkun*, *kani-muhkuna*, *kani-muxkuna*) – of the Sakhalin (Karafuto) Ainu are kept in museums in Japan: one example in the Hokkaido Museum in Sapporo, Hokkaido; four examples in the Ainu Museum in Shiraoi, Hokkaido; one in Hakodate City Museum, Hokkaido; and one in the TANABE Collection of the Research Centre for Japanese Traditional Music, Kyoto City University of Arts, Kyoto.

This paper studies the background information behind them, especially that of the instrument in

Kyoto, which was collected by Hisao TANABE (1883–1984), a musicologist who was an initiator of the study of Asian music in Japan. TANABE described the instrument in different publications, sometimes with illustrations, but there we find several inconsistencies and questions.

Also, the origin of the *kani-muhkun* is discussed, taking into account old and modern examples and photos from neighboring ethnic groups, including Hokkaido Ainu and Japanese to the south, and Uilta (Orok), Nivkh (Gilyak), Ulch, Nanai, Udege and Sakha (Yakut) to the north.